ノンフィクション全開宣言！

吃音と生きる

4 新人看護師はなぜ死んだか

二〇一三年七月、北海道のある病院に勤めていた看護師が、自ら命を絶った。吃音を咎められたことが引き金になったのか。病院側は今も口をつぐむ。

近藤雄生（こんどうゆうき）
ノンフィクションライター

1976年東京都生まれ。東京大学大学院修了後、5年半にわたって世界各地を旅・定住しながらルポを執筆。08年に帰国。著書に『遊牧夫婦』『中国でお尻を手術。』『終わりなき旅の終わり』など。

札幌での仕事を終え、夜六時五四分札幌発のいしかりライナーに乗り込んだ。二〇一四年一一月のこと、札幌は地面がうっすらと雪に覆われ、寒さが本格的に始まろうとしているころだった。

外の景色がすでに何も見えなくなっている中、列車は北西へと向かっていく。混んでいたが何とか座れて、四〇分ほど揺られていると小樽駅に到着した。昭和の時代に戻ったような風情あるホームから階段を降りて駅前の広場に出ると、小柄な女性がこちらを見て会釈をした。私は小走りで向かいながら挨拶を返し、すぐに彼女の父親が運転する車に同乗した。

女性と初めて会ったのは、この二週間前にさかのぼる。愛知で行われた吃音ワークショップでのことだった。彼女は、そのさらに一年以上前の二〇一三年七月に自ら命を絶った男性看護師、飯島博也（仮名）の姉だった。

姉はワークショップの壇上に立ち、吃音のあった弟が死に至る経緯について話をした。もともと警察官を目指していたものの、何度受けても面接でうまく言葉を発せないことから落ち続け、看護師を目指すようになった。そして看護学校に入り、三四歳でようやく看護師として初めて正規の仕事に就いたのに、そのわずか四カ月後に自ら人生に幕を下ろしてしまったのです、と。

その言葉には、大きな悲しみだけでなく、飯島が勤務していた病院への強い怒りが込められていた。

「弟が自死するまでに至ったのは、病院での新人教育が原因だったのではないかと私たち家族は考えています」

彼は、緊張する場面で吃音が強く出た。指導者はそれを知りながら、同僚たちがいる目の前で話す練習をさせたり、患者の前で怒鳴ったりした。そうやってども る弟に特にきつく当たり、彼を追い詰めていったようなのだ、と。

「吃音を含めた人間性を、弟は否定され続けたのです」

声を詰まらせながら懸命に訴える彼女の言葉に私は心を動かされた。詳しく知りたい、知らなければならない。そう思った。いったい何があったのか。なぜ飯島は亡くならなければならなかったのか。ワークショップのすぐ後に、私はちょうど札幌を訪れる予定があった。その際ゆっくりお話を聞かせてもらえないかとお願いし、この日、彼女たちの住む小樽へとやってきたのだった。

彼女の家に着いたときにはすでに八時を回っていた。北海道らしい二重扉の玄関から中に入ると、彼女の母親が迎えてくれた。小柄でにこやかなその姿が、自分の母親に重なった。そしてふと、飯島が自分と同年代であることを思い出した。

居間の一角に祭壇があり、その遺影によって私は初めて、彼の顔貌を知った。

「看護学校の卒業式のときの写真です」

母親の言葉を聞きながら私は仏前に座り、線香を一本手向けて手を合わせた。彼は淡いベージュの和服姿で、凜々しい笑顔を浮かべている。目じりの下がった優しげな眼と頬の笑窪が印象的で、まさにこれから社会に出るという節目を前に、期待感と緊張感を持つ表情に見えた。

その新たなスタートからあまりにもすぐ訪れた彼の死に、家族は言葉にできないほどのショックを受けた。呆然とし悲嘆に暮れた。しかしそのうち、なぜこんな事態を迎えることになったのかを考え、調べていくと、少しずつ病院に対しての疑念が膨らんでいったようだった。病院の対応、同僚の言葉、飯島が残したメモやメッセージのすべてが、何かを物語っているように思えたのだ。

飯島の死については、テレビや新聞でも大きく扱われ、吃音というものが当事者にとっていかに深刻な問題になりうるかを伝えていた。しかし家族の訴えが事実だとすれば、この悲劇は吃音そのもの以上に、一人の吃音者に対しての職場のあり方こそが問題にされなければならないはずだった。

「生きている価値がない、他人に迷惑をかけるだけって、最後のメッセージにあったのですが、弟はそんなことをいう人間ではありませんでした。病院でよほど何かあったとしか思えないのです」

姉と両親の語る言葉には切実な思いが詰まっていた。そのひと言ひと言に必死に耳を傾けているうちに、時間はあっという間に過ぎていった。

「もう行かないといけませんね」

居間の壁にかかった時計を見ながら、姉が言った。札幌に戻る終電の時間が近づいていた。母親はお土産にと、地元の蒲鉾などを持たせてくれ、父と姉は行きと同じく駅まで車で送ってくれた。姉は私と同じ年で、飯島はその二つ下だった。車に乗り外の暗い景色を眺めながら、飯島ではなく自分がここに座っていることの悲しみを思った。駅に着き、二人に別れを告げて駅舎へと駆けこみながら心に決めた。必ずもう一度、戻って来ようと。

口を閉ざす病院

翌朝、札幌の友人宅で目を覚ますと、ふと思い立ち、件の病院を訪れることにした。昨夜の話を思い出し、病院がこの

状況をどう受け止めているのかを自分で確認したくなったのだ。夕方に北海道を発つ予定だったのでまだ時間はあった。

場所を検索して、朝のうちに訪れた。病院は札幌市中心部の北側にあった。循環器系の専門病院で、病床数から見ると中規模に当たるらしい。広い駐車場を通って中に入り、年配の患者たちと並んでソファに座り、何を聞くべきか考えてから受付に声をかけた。看護部長と話したいと言うと、内線の電話ですぐ取り次いでもらえた。まもなく受話器越しにその声が聞こえてきた。彼女こそが、家族がたびたび名前を出していた人物だった。はじめは穏やかで丁寧な口調だったが、私が、「吃音の取材をしています。飯島さんの件で……」と目的を話すと、しばらく沈黙したあとに声色を変え、不機嫌そうにこう言った。

「突然、取材だなんて失礼ではないですか。どういうルートで私のところにこうしていきなり来ることになったのか、全くわかりません」

私は突然の非礼を率直に詫びた。その上で自分の意向を改めて伝えたが、彼女はただ同じ言葉を繰り返した。では改めて正式に依頼をすれば、取材をお受けいただけますか。そう聞くと、「連絡をもらってから病院としての対応を考えます」と彼女は言った。私はそれ以上その場でできることが思いつかず、引き下がらざるを得なかった。しかし、会話の中で飯島についてはその名前すら口にせず、ただ不快感だけを露わにした対応に、病院の本音が垣間見えたような気がした。

北海道を離れ、しばらくした後、私は病院に取材依頼の手紙を出した。返事はすぐに届いたが、「故人の名誉及びプライバシー」を理由に断られた。家族には許諾を得ている、むしろ是非詳細を知りたいと言っている、と書いて再度依頼を送っても、やはり無味乾燥な短い回答が返ってきただけだった。

病院を取材するのは確かに難しそうだった。札幌のテレビ局STVに対しても、「コメントすることはありません」と答えているし、北海道新聞に対しては取材には応じているものの「亡くなる前日も予兆はなかった」とし、説明は尽くしたとの立場を取っているようだった。

病院関係者に個人的に取材することも考えたが、少なくとも現状では受けてもらえそうな状況ではなかった。そこで私は、まず飯島自身について、もっと詳しく知ろうと考えるようになった。彼がどんな人生を送ったのかを知ることで、きっと見えてくることがあるはずだからだ。

その思いを形にするため、二〇一五年六月、私は七カ月ぶりに北海道を訪れた。四日間という限られた時間だったが、車を借りて緑あふれる大地を毎日走り、飯島と親しかった人たちに会えるだけ会っていった。すると少しずつ、彼の輪郭が見えるようになっていった。

警察官になる夢をあきらめて

「明るくて、みなを盛り上げる人でした」

ほとんどの親しい人たちが異口同音にそう言った。カラオケではXJAPANを熱唱し、よく物まねをした。幅広いことに興味があり、特技は「どの年代の人とも話題を合わせて話すことができる

ことなんだ」と言っていた。写真を見ても、特に高校時代などはいつもおどけた顔で写っていて、隙あらば人を笑わせようとする彼の陽気な人柄が覗き見える。

周囲によく気を使う人だったこともみなが言った。サービス精神が旺盛で、とにかく人の話をよく聞いてくれる。輪に入れないでいる人にふと声をかける。みなが嫌がる仕事を率先してやってくれる。

もちろんこれらは彼のほんの一面でしかないだろうが、彼が明るく優しい人物であったことは見えてきた。

一方、彼の吃音について聞くと、人によって印象は異なった。重かったという人もいたが、普段はほとんど気づかないくらいだったという人もいる。それは飯島との関係性や、どういう場面で彼と接しているかによっても違っていた。人前で話す時にどもりやすかったことはみな記憶していたが、飯島はそれを冗談にできるようなキャラクターだったため、彼が吃音をそれほど苦にしているとはみな思ってもいなかったようだった。

しかし大学時代が終盤を迎え、警察官の採用試験を受け出してからは、吃音が彼の人生に少なからぬ影響を及ぼしていることが、周囲にも明確になっていった。何度となく受験をし、筆記試験はいつも通るものの、面接で必ず落ちてしまう。母親は、どうしてだろうと思い、何気なく聞いてみた。最初は適当にはぐらかされたが、そのうちに、吃音が原因らしいことがわかってくる。

「もちろん私たちも、息子の吃音については幼いころから知っていました。でも、明るい子だったから、苦労はしているだろうと想像しつつも、自分で撥ね飛ばしているんじゃないかなとも思っていたんです」

大学時代、毎日のように一緒に過ごしていたという柴田雅裕も、飯島が試験に落ちた後に飲みに行き、「じつは面接でうまく話すことができないんだ」と言うのを聞いて驚いた。

「面接官に覚えられて、『また受けに来たの？』って言われたと。そして『自分は身体が不自由な人の気持ちがわかる警官になりたいんです』と言い返したんだって言っていました」

それでもあきらめず、アルバイトをしながら、年二回の採用試験を七年ほど受け続けた。しかし何度受けても面接になると、どうしても言葉が出なかった。言うべきことはわかっていても音にならず、ただ「随伴症状」で手足だけが苦しげに動いてしまう。悔しかったに違いない。

自分はどうすればよいのだろうか。友人たちがそれぞれ社会で活躍するのを見聞きしながら、焦り悩んでいたことは想像に難くない。そうした中で三〇歳近くになり、飯島はいよいよ夢に区切りをつけた。警察官をあきらめて看護師という新たな目標を見出したのだ。ちょうどそのころ突発性難聴という難病を患った母親に付き添う看護師の姿を見て、その仕事に惹かれたという。世話好きで面倒見がよく、警察官を目指す上でも「身体の不自由な人」に思いが及ぶ彼にとって、きっとしっくりくる世界だったのだろう。

意志が固まったのは年末ごろだった。時期的に選択肢は限られていたが、春から入れそうな学校が見つかった。そうし

て、小樽の実家から約七〇キロ東に位置する岩見沢に移り住み、新設間もない看護学校に通う生活が始まったのだ。

周囲も予期せぬ突然の死

長く追った夢を断念して、新たに三年、一〇歳ほど若い人たちとともに学生に戻るのは楽ではなかったかもしれない。が、やはりこの学校でも、すぐにみなと打ち解けた。同期で入った女性の一人は、「ずっと年上なのに対等に接してくれて、謙虚な人」という印象をもった。同じく親しかった他の同期生は「いつも人のいいところを見つけてくれる人」だったと思い出す。学科の勉強もとてもよくできて、みなから一目置かれる存在だった。

しかし、二年のとき、看護学生の誰もが大変だと口をそろえる病院での実習で、飯島は人一倍苦しんだ。皆で一日のことを話し合うカンファレンスの場ではどもりが強く出てしまい、発表することがうまくできない。また、患者との接し方においても、複数の点でするべきことができていない、という評価をされた。そして結局合格を貰えず、留年することになってしまったのだ。彼はこのとき、猛烈に落ち込んだという。

飯島にとって、ここでもう一年遅れることは本当に辛かったのだろう。早く社会に出なければ、という気持ちで焦っていた。卒業したら結婚しようと考えていた相手もいたが、このころ別れることになった。「これ以上待たせられないから」。同期の女性は、彼がそう言っていたのを思い出す。その女性は言う。

「私も一年休学したため、その後、最後の学年に上がったときに再び飯島さんと一緒になって、久々に会ったんです。そのとき、入学当時は目立っていなかった吃音が重くなっている気がして驚きました。それで思ったんです、きっといろいろあったんだろうなって」

留年やその他の苦労のすべてを吃音に帰すべきかはわからない。それ以外の点で不十分なところがあったのかもしれない。ただ、この女性が感じたように吃音は辛いときに顕著になることが少なくないし、そのころの飯島に様々な形で吃音が影響を与えていたことは確かだろうと私は思う。それでも、彼は乗り越えた。二〇一三年三月、卒業の日はやってきた。看護師国家試験にも合格した。看護師になれたのだ。

四階建てのマンションに部屋を借り、病院に勤め始め、初めての社会人生活が始まった。それは飯島が待ち望み、ようやく手に入れた日々のはずだった。しかし長くは続かなかった。わずか四カ月で終止符が打たれてしまったのだ。

周囲の誰にとっても、飯島の死はあまりにも予期せぬ悲劇だった。看護学校の友人らは、亡くなる二週間ほど前に飲みに行ったが、何も変わった様子はなかったという。みな看護師となったばかりの日々の苦労を打ち明けたが、飯島は、自分も普通に大変だよ、という以上は語らなかった。

飯島は亡くなる一年半ほど前から吃音者の自助団体である「言友会」に参加するようになり、以来その仲間との付き合いが親密になったが、特に親しかった藤井哲之進も一切の変化を感じなかった。そして家族も、何も変化には気づかなかった。母は言う。

「亡くなる一〇日ほど前にうちに来たとき、仕事が楽じゃないとは言っていたのですが、まだ入って三カ月が過ぎたくらいだったこともあって、私たちも特別気に留めることもなくて……。その同じ月に、まさかこんなことになるとは想像もつきませんでした」

しかし亡くなったあとに飯島のパソコンを調べてみると、すでにその頃、死の方法について検索していた形跡が残っていた。おそらく最後の一カ月は、家族や友人と会いながらも、彼は自らの死について考えていた。唯一何か違いを感じたと言ったのは、言友会のキャンプの下見に一緒に行った南孝輔だった。「そのとき、いつも以上にひどくどもっていて、元気もなくて、どうしたんだろうって思ったんです」。亡くなったのはその四日後のことだった。

飯島のスマホに遺されていた家族へのメッセージにはこうあった。

「この先の人生に悲観して、生きることを拒否したけれど、誰も恨まないでください。もう疲れました。できない自分、やろうとしない自分、逃げている自分、結局何も変われなかった、こんな自分に価値はなく、このまま生きていても人様に迷惑をかけるだけ。だから、自分の人生に幕を閉じます」

高校時代の友人である佐々木和雄はこの言葉を読んで言った。

「自分が知っているいいやん（＝飯島）の顔が、この言葉とは全く結びつかないんです」

誰もが言葉を失った。

「何度練習してもダメだね」

病院での四カ月間にいったい何があったのか。病院から何も説明がないことに対して家族は到底納得できなかった。だから自ら動きだすことを決めた。

現場の状況を知っていそうな同僚の何人かに話を聞くと、指導者が飯島だけに特にきつく当たっていたという声があった。姉が愛知のワークショップで話した通り、たとえば、詰め所で同僚たちが見ている中、彼だけ検査の説明の練習をさせられていたことがあった。何度も、どもりながら言わされて、指導者には「何度練習してもダメだね」などと言われていたという。患者の目の前で大声で叱責されたときには、その言い方があまりにひどかったため、患者が他の看護師に、「あの子（＝飯島）は悪くない。指導する人の説明の仕方が悪かったからこうなったんだよ」と言いに来たという。

業務に関するメモが書かれた彼自身のノートを読むと、厳しい現場で苦悩する姿が垣間見える。その中には、「伝えるべきことが伝えられていない」「言葉が足りない」「言うことの練習」など、コミュニケーションに関する事柄が多く見られる。急かされる場面などでどもりやすくなる彼にとって、吃音のためにできなかったことが多々あったのだろう。そういうときに、指導者から厳しく叱責されていたらしかった。亡くなる二週間前には、「適性がない」「どうしたら自分が変われるか考えろ」「働けないなら三倍

動け」と上司に言われたらしいことも書いてある。

これらのことを、すぐ飯島の自死と結びつけることはできないだろう。ただ病院でいったいどんな指導がなされていたのか、家族が詳しく知りたいと思うのは当然である。しかし、自分たちで調べるのには限界がある。飯島の同僚たちもみな立場があり、「協力は難しい」と言われれば強くは押せない。事情を知る人たちが口をつぐめば真相は見えようがない。

救いが見えてこない中、今年三月、家族は調べた内容を元に労災の申請を行った。それは、すべてを過去のこととして流し去ったかのように見える病院に対しての、家族の心からの訴えだった。だがこの際にも、病院の驚くべきいい加減さが露呈する。家族が予想した通り、病院はその証明を拒否したが、病院側の拒否書を受け取りに行き確認すると、そこには飯島の名前が間違って記載されていたのだ。書かれていた名前は、新聞の記事で使われた仮名だった。姉は言う。

「おそらく病院は新聞記事を出してきて、その記事を見ながら拒否書を作成したのではと思います。あまりにも適当な対応に労働基準監督署の方も呆れていました。一人の職員の命を何だと思っているのか。本当に腹立たしくなりました」

職員の一人が自ら命を絶ったという事実を病院がいかに軽く捉えているかを、このことははっきりと示している。

病院に対する家族の疑念はこうした過程で膨らんでいったが、その萌芽は、じつは彼の死の当日にすでにあった。

「その日、夕方四時前ごろに、病院から私たちの家に電話がありました。息子さんが連絡もないまま欠勤しているから心配している、電話しても出ないんだと。最初はそれほど深刻には考えていなかったのですが、あまりに心配だと言われたので気がかりになったのです」

確かに息子に電話をかけても応答がない。そこで母は、学校で事務をする姉に電話をした。姉は母の話を聞いて、すぐに胸騒ぎがしたという。

「母が、『看護部長からかかってきた』って言ったからです。『ほんとに看護部長って言ったの?』と確認すると、『そう言った』って言うんです。看護部長といえば、会社の副社長のような人です。新人看護師の一人が数時間仕事に来なかっただけで、看護部長が直々に電話してくるのが、とても不思議だったのです」

姉はすぐには職場を離れられなかったため、札幌にいる伯母に連絡し、母親と一緒に飯島のマンションに行ってもらうようにお願いした。それを受けて、伯母と母はすぐに駆けつけ、合鍵で中に入った。

ひどくちらかった部屋の中には、飯島が一人、眠るように横たわっていた。触れると身体は冷たかった。その後やってきた救急隊員は言った。「お母さん、もう難しいです」。

洗面所には洗濯物が山となり、流しにはインスタント食品の容器が食べたまま置かれていた。母が記憶していた部屋の様子と全く違った。そのすべてがあまりにも予期せぬ事態で、母はただただ気が動転するばかりだった。

しかし、もしかすると病院は、こうなる可能性を危惧していたのではないか。後に家族はそう感じるようになる。それは、看護部長から電話がかかってきたから、という理由だけではない。飯島のスマホの履歴を見ると、この日一二時半からの勤務予定に対して、その一五分後からの三〇分間に、実に六回もの着信があったのだ。その上、母親が合鍵を持って部屋に行く前に、病院の人間が彼の部屋の前まで訪ねてきたことがわかっている。なぜ病院はそこまでのことをしたのだろうか。

亡くなった二日後、お通夜の前日のこと。初め、飯島を密葬で送るつもりだと病院に伝えると、お花を出すので場所などを教えてほしいとのことだった。しかしその後、諸々の事情から一般的な葬式にし、自死を公表するつもりだと告げると、病院は態度を一変させたという。

「公表されると自分たちの病院の求人に影響が出るって、母に電話で言ったんです。募集しても看護師が集まらなくなるから困ると。それが大切な家族を亡くした人に言う言葉でしょうか」

強い口調で姉が言った。花も出せるかわからないというので、「それなら、お参りも花輪も要りません」と、呆れた思いで母は電話を切ったという。

翌日の通夜には看護部長、事務長、病棟の看護課長の三人が来たが、初対面の父親へひと言挨拶をするでもなく帰っていった。また、後に家族が聞いたところでは、葬儀が終わってしばらくしてから、院内のある人が飯島の家にお参りに行きたいと上司に言うと、事前に病院の許可をとるよう求められたという。そのせいか、その後誰ひとりとして病院関係者はお参りに来ていない。

「最初は、もしかしたら息子が患者さんに、何か取り返しのつかないミスをしてしまったのかな、とも思ったんです。でもそうであれば、病院側も言ってくるはずです。何も言ってこないところをみると、別の原因が何かあったのではないかって考えるのは、自然だと思うのです。そうして、息子が遺したメッセージの中の『誰も恨まないでください』という言葉の意味を考えるようになったのです」

何があったのか、真相はわからない。しかし、何かがすべておかしいのだ。私もそう思わざるを得なかった。

なぜ「循環器科」を目指したか

家族や友人たちとの間で何度も話にのぼったのが、なぜそもそも飯島は、循環器系を専門とするこの病院を選んだのかということである。生死に直結する病気を多く扱い、迅速な対応が求められるこの分野では、吃音があることは看護師として働く上で障害になりうるのではないか。周囲の少なからぬ人がそう危惧したのだ。看護学校で担任をしていた佐藤悦子は、吃音で苦労する飯島の姿を長く見てきた立場として、「緊急性のある科は難しいのではないか、もっと合った病院があるのではないか」と彼に伝えていた。日常的には彼の吃音をそれほど意識することがなかった家族や大学時代の友人たちにも、同じような懸念があった。

それでも飯島は、この分野に進みたいという思いを曲げなかった。やりたい、という強い思いがあったのと同時に、彼

には、この病院であれば大丈夫だと考える理由があった。就職説明会のブースで、その病院の当時の看護部長と直接話す機会があり、「吃音があるから看護師に向いてないということはない、循環器系で働きたいなら自分の病院に来なさい、万全の態勢で待っているから」と言われていたのだ。その看護部長は、飯島の看護学校の講師もしていて面識もあったため、彼女の言葉は飯島にとって大きな安心材料となっていた。

しかし、飯島が病院に勤務し始めた時、看護部長は別の人物に替わっていた。思いもよらない事態に彼は不安になったが、だからといってやめるわけにもいかなかった。引き継ぎはちゃんと行われているはずだ。そう信じて病院に勤め出した。勤務開始後、書面で自己分析を提出するときにも、吃音についてはっきりと書いた。「吃音があり、緊張する場面で言葉が出にくくなる。急かされるとさらに言葉が出なくなる」と。だが、そのことが考慮されている様子は一切なかった。

まだ看護学校に入る前、飯島が警察官の試験を受けながらアルバイトをしていたのは、近所のおもちゃ屋だった。言友会で仲の良かった藤井は、彼がおもちゃ屋の話をするときは本当に楽しそうだったと振り返る。当時その店の店長だった菅原えみこは、子どもたちに慕われ、とても生き生きと働いていた飯島の様子を教えてくれた。

「電話にも出ていましたし、イベントで子どもたちをまとめたりもしてくれて、吃音があるからこれができない、ということはなかったと思います」

飯島はきっとここでは、心から安心して働けたのだろう。優しく、親しみやすく、面倒見のよい彼のよさを存分に発揮できる場所だった。

大学のゼミ以来とても親しかった近藤依子は、飯島のそうした性格も吃音についてもよく知っていたからこそ、何度も彼に強く言った。看護師はきっと向いている、でも急かされそうなところは絶対にやめた方がいい、小児科が一番合っているのではないか、と。しかし飯島の意志は固かった。

「難しくて大変そうな循環器系に行くことで、みんなに追いつきたいっていうような意識があったんじゃないかなとも思うんです。三四歳になって初めて正規の仕事に就くということへの焦りや引け目のようなものが、飯島くんを無理に背伸びさせてしまったのかなって……」

飯島についてみなが言っていたことがもうひとつある。それは、彼がほとんど自分の内面を語らなかったことである。親しくしていた友人たちにも、彼の心のうちはなかなか見えてこなかった。弱音を吐かない人だったともみな言った。

そのことについて、大学時代の親友の一人である柴田が言ったことが忘れられない。

「いいちゃん（＝飯島）は、いつも聞き役に回る人でしたが、ぼくに何度か、深い悩みを打ち明けてくれたことがありました。そのときだけはかなりどもっていたのを覚えています。そういうときに、ああ、いま本音を語ってくれているんだなって感じたのです。もしかしたら、いいちゃんが自分のことをほとんど話さなかったのは、吃音のある彼が身につけたある種の〝処世術〟だったのかもしれないって思うんです。話すのではなく聞くことで人の輪に入っていくということを、無意識であれ、ずっとやってきたのかもしれないな、と」

その言葉を聞いて私は思った。飯島は吃音があったからこそ飯島だったのかもしれない、と。飯島にとって吃音とはなんだったのか。しかしいくら考えても、もう答えは出ない。

遺された彼の映像

飯島の死を伝えたテレビのニュースでは、彼が吃音に関する研修会で講演する様子が流された。亡くなる一年ほど前の映像である。濃い色のスーツにネクタイをしめた姿で壇上に立ち、飯島は自らの吃音について、吃音者として社会へ求めることなどについて話をした。言葉の出だしで詰まり、時に苦しそうに「んー、んー」という音を挟み、身体を前後に動かしながら、優しげな声で言葉を継いだ。そして最後をこう締めくくった。

「私のように、……たくさんの悩みを抱えた、吃音者が、少なくなる社会を願って、私の発表を、終らせていただきたいと思います」

私にはそれが唯一見ることができた、彼の動く姿と声だった。

穏やかな初夏の北海道で、家族や友人らが、時に笑い、時に声を詰まらせながら飯島のことを話す様子を見るうちに、その映像で見た以外の姿が、私にも思い浮かぶようになった。飲みながら、「そうだね、そうだね」と相槌を打ってじっくりと話を聞く姿。おもちゃ屋に来る子どもや病院の患者に気さくに話しかけ、相手を和ませる姿。いつしか私も彼に惹かれ、友人だったような気持ちになった。ふと声が聞こえるような瞬間もあった。

四日間の滞在を終え、レンタカーで空港に向かう途中、飯島のいくつもの表情を心に思い描きながら、彼が最後に住んだマンションを訪れた。ベージュ色のこぎれいなそのマンションは大通りから少し入った静かな通りに面していた。彼の部屋は最上階の四階の道路側の角だった。私は入り口を入って階段を上がり、部屋のドアの前に立った。焦げ茶色のドアはきれいで、いまも新しく見える。

飯島は亡くなる前夜、大好きだった回転ずしを食べに行った。そして当日の朝、一度外に出て最後に必要だったものを買いそろえてから、部屋に戻ってきたことがわかっている。

最後に階段を上がり、銀色のドアノブを回して部屋に入る彼の姿を想像した。しかしその表情だけは、どうしても思い浮かべることができなかった。そして私は胸にこみ上げてくるものを感じながら、繰り返し彼に問うた。いったい何を思いながら、このドアを開けたのですか、と。

＊

家族には、本人を実名にしたいという思いもあった。しかしさまざまな葛藤と現実的な問題を考慮した末、仮名とした。私はその気持ちを何よりも尊重したい。だから、病院の名前も伏せた。あとはすべて実名である。ご了承いただきたい。

七月、飯島が亡くなって二年が経った。

（敬称略）45